

編集後記

東京大学の「秋入学」への切り替えが象徴するように、日本の大学と学術の世界に国際化やグローバルライゼーションの影響が浸透し、日本における医史学研究においても、国際化が確実な形で進行している。『日本医史学雑誌』には英語の論文や外国人による論文が頻繁に掲載されるようになったし、「アジア医学史学会」は2012年の12月に慶應義塾大学・日吉キャンパスで開催する予定である。世界各国からの日本を主題とした医史学の研究者の受け入れや指導が活発に行われているし、日本の若い研究者たちは、英語を中心とする外国語で業績を作ることを優先するようになっている。このこと自体は時代に適った良いことであろうし、大学などの学術研究機関に身を置く医史学の研究者にとっては、良い悪いを論じる以前の構造上の変革であり、この構造の中でそれぞれの多様性を発揮しなければならない状況になっている。

この国際化の流れの中で、日本医史学会は、学会としてどのように対応し、何をすべきなのだろうか。日本の医学は、古代に中国の医学の影響のもとに成立し、近世の蘭学が欧米化の先端を切り、近代の医学は西洋文化のシンボルであった歴史を持つ。医学は、日本の国際化を牽引する役割を担ってきたと言ってよい。その医学の歴史を研究する医史学こそが、長い国際化の伝統を引き継いで、現状の国際化とは違ったモデル、おそらく、それぞれの地域の特性を生かした新しい国際化のモデルを体現する日が来るのだろうか。これは、困難と可能性の双方が感じられる道であるが、この数年の医史学会はその方向に向かって歩みを進めているように思う。

(鈴木 晃仁)